

名詞の意味的特徴

——形容詞から派生した名詞の意味的特徴から——

堀 誉 子 美

1. 目 的

世界の言語の中で、その多くが、名詞と動詞、更に形容詞という品詞を持つと言われて
いるが、日本語も又、その一つである。日本語における形容詞という品詞は、形態的には
二種類あって、これを伝統文法では、形容詞・形容動詞といて、日本語教育では、イ形容
詞・ナ形容詞といて区別している。更に、これらの形容詞のうち、前者のもの、つまり
日本語教育でイ形容詞と呼ばれているものが前項に要素を伴なって合形成になったとき、
その連体修飾形がナ形容詞と同じ形態になったり、名詞と同様な形態をとったりする現象
がある。例えば、「高い」は「割」と合成された時、「割高い」とは言わず、「割高な」「割
高の」となり、「重い」は「身」と合成されると、「身重い」とはならず「身重な」「身重
の」となり、「長い」は「面」と合成されると、「面長い」とはいわず「面長な」「面長の」
という形で連体修飾を行なう。本稿では、この二種類の形容詞を共に、形容詞と呼び、連
体修飾形が「ノ」であるものを、形態的に名詞に近づいたものと見なし、名詞と呼ぶこ
とにする。さてこのような形態的に名詞と形容詞の間の入り組んだ現象が見られるのは、日
本語における名詞と形容詞は、その間に一線を画すことができない、類縁性が高いもので
あるということによる。

一方、品詞分類とは、本来、形態・機能・意味の三つの観点から行われるものであると
されながらも、文の構造を説明するのに最も簡明なものとするために、形態や機能の特
徴を中心に行なわれてきた。意味に関しては、名詞とは「物や人の固有の呼び名や類につけ
られた名前を表す」ものであるとか、形容詞とは「物事の様態を表す」ものであるという
記述がなされるだけで、両品詞間に渡って機能する語を分析し、他との関連の中で、各々
の品詞性を意味的に捉えた研究は行われてこなかった。形態的に名詞・形容詞と認定され
た語の関係はどのように位置づけられるか、形容詞との比較において、名詞の意味的特
徴を明らかにするのが本稿の目的である。

2. 方 法

その方法として、両品詞間で転成が生じる語——ここでは形容詞から派生した名詞——
を取り上げ、その意味から、その語が形容詞ではなく名詞の形態をとるようになった要因
について考察する。具体的には、1. で見てきたような、形容詞がある前項要素を伴うこ
とによって、形容詞としての形態から名詞的形態に移行する語と、移行しない語の間に意味

の違いを求め、前者のような現象の中に、形容詞と区別される名詞の意味的特徴を求める。

3. 先行研究

形容詞が、接頭語を伴って合成語となった時、形容動詞の活用を持つようになる現象を初めて指摘したのは、三浦つとむ(1971)である。その中で以下の例をあげ、

- 切り方がぶ厚だ。 (←ぶ+厚い)
 病気は処置なしだ。 (←処置+なく)
 水が生ぬるだ。 (←生+ぬるい)

これらの現象の原因を、「こみ入った属性の表現に発展したため」と説明し、水谷静夫(1951)の、形容詞は活用が整わず、入り組んだ概念を専ら指す語がなかったため、代用の表現法として形容動詞が発生した、という形容動詞起源説にあい通ずるものであるとしている。

これは、述部の形態でイ形容詞か否かを判定したものだが、連体修飾形には「イ」「ナ」「ノ」の三つがあり、より形態的に名詞に近いものを探しだせる。ここでは、形容詞が前項要素を伴って合成形になったことによって連体修飾形語尾「イ」が「ノ」に変わったもの、「イ」あるいは「ナ」と「ノ」の両形が共用されるものを、より形態的に名詞に近ずいたものとして分析をすすめる。

4. 合成語の形

ここでは、『動詞・形容詞問題用語用例集』(1971)、『分類語彙表』(1964)「資料近代文法書および辞書の形容動詞一覧」『品詞別日本文法講座4』(1973)『新明解国語辞典 第三版』(1977)、小説・雑誌・新聞の使用例から選んだ、合成形を多く持つ形容詞31語とその合成形を取り上げる。しかし、「丸い/な」「赤い/の」など、合成形になる以前に両形を持つ形容詞は含まない。これらの形容詞が合成形になった時、それぞれ「イ」「ナ」「ノ」どの形で連体修飾を行なうかを一覧できるようにしたのが次の<表1>である。

<表1> 合成形容詞の前項要素と形

後項形容詞	前項要素	イ			後項形容詞	前項要素	イ			
		い	な	の			い	な	の	
長	い	○	×	×	短	い	×	○	×	
	末	○	×	×		近	手	○	○	×
	細	○	×	×			間	○	○	×
	気	×	○	×			手	×	○	×
	縦	×	○	○			身	×	○	○
	面	×	○	○		遠	間	○	○	×
	胴	×	○	○			程	○	×	×
切れ	×	○	○	縁	○		×	×		
太	夜	○	○	○	広	手	○	×	×	
	夜	×	×	○		末	×	×	○	

後項形容詞	前項要素	一い	一な	一の 二が	後項形容詞	前項要素	一い	一な	一の 二が
狭高	背手	×	×	○	軽	印象	○	×	×
	香名	×	○	×		目	×	○	×
	悪名	○	×	×		手	×	○	×
	計算	○	×	×		気	×	○	×
	気割	○	×	×		身	×	○	×
	中	×	○	○		尻	×	○	×
	物価	×	(○)	○		足	×	×	○
	円	×	×	○		重	×	×	○
	出来	×	×	○		身	×	○	○
	売上	×	×	○		根	○	×	×
	残	×	×	○		力	○	×	×
	厚	ぶ	○	×		×	心	○	×
手		○	×	×	気	○	×	×	
肉		×	○	○	抱	○	×	×	
地		○	○	○	我	○	×	×	
ず		○	×	×	ぬ	○	×	×	
極		×	×	○	ば	○	×	×	
か		○	×	×	り	○	×	×	
心		○	×	×	か	○	×	×	
極		×	×	○	ひ	○	○	×	
遠		×	○	○	気	○	○	×	
草		○	×	×	う	○	×	×	
毛		○	×	×	す	○	×	×	
太	罪	○	×	×	う	○	×	×	
	心	○	×	×	す	○	×	×	
	疑	○	×	×	の	○	×	×	
	慮	○	×	×	ほ	○	×	×	
	慮	○	×	×	根	×	○	○	
	義	○	×	×	真	×	○	○	
	味	○	×	×	気	○	×	×	
	縁	○	×	×	性	○	○	×	
	慎	○	×	×	意	○	○	○	
	親	○	×	×	地	○	○	○	
	哀	○	×	×	乳	○	×	×	
	惜	○	×	×	酒	○	×	×	
浅深	感	○	×	×	か	○	×	×	
	心	○	×	×	び	○	×	×	
	疑	○	×	×	古	○	×	×	
	慮	○	×	×	年	○	×	×	
	慮	○	×	×	寄	○	×	×	
	義	○	×	×	り	○	×	×	
	味	○	×	×	陰	○	×	×	
	縁	○	×	×	気	○	×	×	
	慎	○	×	×	バ	○	×	×	
	親	○	×	×	タ	○	×	×	
	哀	○	×	×	水	○	×	×	
	惜	○	×	×	分	○	×	×	
厚	感	○	×	×	別	○	×	×	
	心	○	×	×	面	○	×	×	
	疑	○	×	×	倒	○	×	×	
	慮	○	×	×	カ	○	×	×	
	慮	○	×	×	知	○	×	×	
	義	○	×	×					
	味	○	×	×					
	縁	○	×	×					
	慎	○	×	×					
	親	○	×	×					
	哀	○	×	×					
	惜	○	×	×					
感	○	×	×						

後項形容詞	前項要素	—い	—な	—の —が	後項形容詞	前項要素	—い	—な	—の —が
甘い	塩	○	×	○	寒い	心	○	×	×
	極	×	×	○		むさ	○	×	×
	極	×	×	○		胸	○	×	×
	ほろ	○	×	×		寝	○	×	×
	甘	○	×	×		見	○	×	×
新しい	ま	○	×	×	あい	○	×	×	
	耳	○	×	×	うすら	○	×	×	
	目	○	×	×	お	○	×	×	
恐ろしい	末	○	×	×	膚	○	×	×	
	そら	○	×	×	恥しい	○	×	×	
苦しい	暑	○	×	×	早い	○	×	×	
	重	○	×	×	気	○	×	×	
	息	○	×	×	手	○	×	×	
	固	○	×	×	足	×	○	×	
	聞き	○	×	×	のろい	×	○	○	

更に、<表1>の合成語をそれぞれ、形態的に名詞的なものから形容詞的なものへと、分類したのが<表2>である。<表2>では、まず、「ノ」形を持つものと持たないものに分け、更に前者を「ノ」形しか持たないものか、「イ」「ナ」形も共に持つものかに着目して分類し、後者は、合成語になったことによる形態の変化が全くもたらされなかったか否か、つまり、「イ」形しか持たないものか「ナ」形も持つものかによって分類した。

<表2> 合形成の形による分類

「ノ」形を持つもの
「ノ」形のみを持つもの
夜長 背広 末広 残高 出来高 売上高 足軽 重軽 極太 極細 極辛 極甘 うすのろ
「ノ」「ナ」形のみ持つもの
胴長 面長 縦長 切れ長 中高 割高 円高 (物価高) 肉厚 身近 遠浅 身重 真暗 根暗
「ノ」「イ」形のみ持つもの
塩辛
「ノ」「ナ」「イ」形を持つもの
意地悪 地厚 太長
「ノ」形を持たないもの
「イ」形のみ持つもの
気長 気短か 手短か 間遠 目深 手狭 手軽 身軽 気軽 尻軽 足早 ひ弱 手荒 木目細か 生暖か お手柔らか

「イ」形のみ持つもの

ひよろ長い 末長い 細長い 程遠い 縁遠い 手広い ふ厚い 手厚い 香高い
名高い 悪名高い 計算高い 気高い ず太い か細い 心細い 草深い 毛深い
罪深い 信心深い 疑い深い 遠慮深い 意義深い 興味深い 因縁深い 慎み深い
悩み深い 親しみ深い 哀れみ深い 惜しみ深い 感慨深い 印象深い す早い
気早い 手早い 根強い 心強い 気強い 辛抱強い 我慢強い ねばり強い
か弱い うす明るい うす暗い ほの暗い 気味悪い 乳臭い 酒臭い かび臭い
古臭い 年寄り臭い 陰気臭い バタ臭い 水臭い 分別臭い 面倒臭い バカ臭い
世知辛い ほろ苦い 甘ずっぱい ま新しい 耳新しい 目新しい 末恐ろしい
そら恐ろしい 暑苦しい 重苦しい 息苦しい 固苦しい 聞き苦しい 心苦しい
むさ苦しい 胸苦しい 寝苦しい 見苦しい あい苦しい うすら寒い お寒い
膚寒い 気恥しい

5. 分 析

合成語個々の意味と〈表2〉のそれぞれのグループ毎の意味の特徴を検討しながら、形容詞が形態的に名詞の特徴を得る条件を以下、考察しながらまとめてゆく。

<1> 大ざっぱに見て、「ノ」形を持つものの多くは、可視的に捉えることのできる、形状に関するものが多いのに対し、「ノ」形を持たない語の大部分は、話者個人の感覚・感情によって、内面的なものを捉えたものが多い。

- (1) 地厚・肉厚/手厚い
- (2) 太長・面長・胴長/気長い・末長い
- (3) 中高/気高い・名高い・計算高い
- (4) 極太/ず太い

これらの合成語は、このような意味的な対立と、形態の違いが一致するものである。又、その他にも、「身重・遠浅・末広・真暗」などが、「ノ」形を持ち、「陰気臭い・世知辛い・辛抱強い・感慨深い・印象深い・気味悪い」などが「ノ」形を持たないことにも、意味的対立と形態の違いを見い出すことができる。

<2> 「ノ」形を持たないものの多くは、ず太い人の「ず太さ」、心細い時の「心細さ」、気高い人の「気高さ」、縁遠い相手との「縁遠さ」、又、「末恐ろしさ」「心苦しさ」「ほろにがさ」「気恥しさ」など、その程度を具体的に測定することも、それを数値で表わすこともできない。一方、「ノ」形を持つものの中には胴長の人の「胴の長さ」、円高の時の「円の高さ」、物価高の折の「物価の高さ」、秋の夜長の「夜の長さ」、肉厚の座布団の「肉の厚さ」等、その程度を数値で表わすことのできるものが含まれる。

具体的に「高い」の合成形をみると、「香り高い」「名高い」「悪名高い」「計算高い」「気高い」においては「ノ」形を持たないが、「割高」「中高」「物価高」「円高」「出来高」「売上高」「残高」においては「ノ」形を持つ。前者の「香り高さ」「名高さ」等は、具体的に数値で表わされたり、測定することができないが、後者において、「中高」は、実測できる寸法であり、「割高」「物価高」「円高」も、その高さを金額で具体的に示すことができる。又、「売上高」「出来高」「残高」に至っては、金額という具体的数値で表わされるも

のであり、金額の種類を示す名称である。

従って、「ノ」形を持つ合成形の属性は、その程度を数値で表わせ得るものが多いのに対し、「ノ」形を持たない合成形の属性は、数値化できないということが言える。つまり、数値化できるというのは、その属性の程度を測定できるスケールが存在するのであり、そうしたスケールが存在するという事は、その属性の程度いかんが、人々にとって区別を要し、それだけ我々の生活に密着していたと考えられる。言い換えれば、区別が必要な、生活に欠かせない属性語程「ノ」形を要求するという法則をこれらの例から推察できるのである。

<3> 物や人に様々な属性を見出すことができるか、その物や人を定義するのにその属性がどれ程重要性を持つかによって、属性を分けることができよう。例えば、「背広」「末広」が、形容詞語幹を含む合成語であるという意識は現在では薄いですが、元来、それと他とを区別できる最も大きな特徴が背幅の広さにあったり、末すばみでも平行でもない末広がりという形や形態に他と区別できる特徴や存在意義があったとすれば、第一義的属性が、そのまま名称として用いられるようになったと推察できる。その他、「足軽」という職名・身分もその職業に従事する者にとって最も要求される歩行速度に関して「軽やかに足を運ぶ」という状態をいったもので、そのものに重要で、かつ特有な特徴において職名を採用した、という点で、これも同様に考えられる。又、「重軽」という名の地蔵は、占いに持ち上げると重く感じられたり、軽く感じられたりし、その重さに未来の導きを読み取ろうとするもので、この地蔵を他の地蔵と区別する特徴で、人々が「重軽さん」と呼ぶようになったものであり、その地蔵の存在意義・特徴により命名されたという点において、同様に考えられる。

これらの語は

- (5)* 非常に背広だ
- (6)* 〃 末広だ
- (7)* 〃 足軽だ
- (8)* 〃 重軽だ

ということではできず、もはや「背の広さ」「末の広さ」「足の軽さ」「重さ軽さ」などその属性の程度性を語彙的にも構文的にも失ない、形態的にも「ノ」形「ナ」形を持たないモノ・コトの名称となったものである。そうしたモノ・コトは名前となった属性を第一義的に持ち、その特徴において他と区別しえるので、その属性を名称として用いるようになったと見ることができる。

<4> 「臭い」「にがい」「すっぱい」「辛い」「甘い」などの合成語には、「ノ」をとるものは少ないが、「塩辛」「極辛」「極甘」においては「ノ」をとる。又、「太い」「細い」の合成語で「ノ」をとるものも「極太」「極細」のみであり、「極」の前接する形容詞はすべて「ノ」をとっている。一方、その他の程度を表わす前項要素「うす」「ほの」「小」を伴った合成語には「ノ」をとるものはない。では、「極」にはどのような意味があるのだろうか。

(9) 極太のマジック

というのは、マジックという製品のメーカーが人為的に定めた太さのランクの中で最も太いランクに属するものであり

(10) 太いマジック

のように、観察者が捉えた属性ではなく、既に区分された太さのランクの一つが「極太」と呼ばれているのであり、(9)は万人がそう呼ぶが、(10)は観察者により異なる場合もある。従って「極」が太さのランク名に用いられるように「中」も用いられれば、「中太(なかぶと)」「中細(なかぼそ)」となり、「中太い」「中細い」とはならないと予測できるのである。又、「太長い」という形状の特徴も、商品の形状からの分類に用いられれば、そのカテゴリーには「太長」という名称がつけられることも又、予測できる。

<5> 「意地悪」「うすのろ」「根暗」は共に<1>の観察結果に反し、「人の性格をマイナス評価する語」として、連体修飾形が「ノ」をとるのみならず、動詞の補語としても用いることができるという特徴を共に持つ。一方、「人の性格をマイナス評価する語」としては、「ず太い」「悪名高い」「罪深い」「分別臭い」「疑い深い」など多く存在するが、こうした形態的特徴は持たない。この両者を形態的に区別するものは何であろうか。大ざっぱに言えば、前者のような性格は、第一印象、あるいは比較的浅い日数で直接観察によって捉えられるが、後者のような性格は、それを知るのにより長い日数、直接観察のみならず、より多くの情報や経験、洞察力も必要となる場合もある。そこに、前者が瞬時に反射的に交される罵倒語として用いられる理由を見いだすことができる。従って、「直接観察で捉えられやすい人の性格をマイナス評価する語」も「ノ」をとる条件に加えられる。

6. ま と め

以上の「ノ」をとる条件、つまり、合成形容詞の中で名詞として捉えられやすい語の意味的特徴についてまとめると以下ようになる。

1. 名詞の形態はモノ・ヒトの属性を表わす形容詞はとることができるが、シク活用系のもの、感情形容詞はとることができない。

面長 切れ長 遠浅 肉厚 極細 etc.

は、モノ・ヒトの属性であるが、

気恥しい 面倒くさい 心苦しい 気味悪い 心強い etc.

は、内面描写をする形容詞である。以下、この属性の種類に関して列挙する。

2. 直接観察で捉えられる実体物の形状に関する属性（絵として描けるもの）

末広 遠浅 中高 肉厚 縦長

以下のものは形状に関する属性ではなく、名詞の形態をとらない。

手広い 遠慮深い 気高い 手厚い

しかし、

ぶ厚い 細長い 小高い

は、形状に関わる属性であるが、名詞の形態をとらない。

- 2'. 決まったものにしか存在しない属性・あるモノに固有な属性

遠浅 切れ長 夜長

2'. そのモノの存在を決定する条件となる第一義的な属性（名詞として条件を整えたものの）

重軽 末広 背広 足軽 塩辛

3. 数値化できる属性

胴長 割高 物価高 円高 肉厚

以下のものは数値化できない属性である。

気長 気高い 計算高い 手厚い

3'. 常に数値で表わされる属性（名詞の条件を整えたもの）

残高 出来高 売上高

4. 人為的に定められた種としての属性

極太 極細 極甘 極辛（中高 太長）

以下のものは種類ではない。

ず太い か細い 世知辛い

5. （直接観察で捉えられやすい、マイナス評価される人の性格）

根暗 うすのろ 意地悪

以下のものは観察のみでなく、より多くの経験・時間を要して捉えられる

罪深い 因縁深い 疑い深い バタ臭い

我々は、眼前にある名前のない物体を指示する時、「その赤いの」「その丸いの」「その四角いの」等、形や色の特徴で指示することが多い。これら色や形に関する属性語が、「赤・青・白・黒・茶色・丸・四角」等と、名詞形をもつことも、考察のまとめ、1. 2. を裏付けるものである。

本稿で見てきた「ノ」をとる属性についてまとめると、概念として鮮明であり、価値が一定し、万人に共通に認識され、具体的に表現されたものであるといえる。こうした属性は、物に見出せる様々な属性の中から、弁別要素として取り出され、これで物が定義付けられる。又、こうした属性の特異性・重要性によっては、個別化・特定化され、その特異あるいは重要な属性で一つの種として独立し、そこに名前が与えられる。こうした命名の過程を、形容詞から派生した名詞の意味的特徴に見ることができるのである。

引用文献

三浦つとむ (1971) 『日本語はどういう言語か』 季節社

水谷静夫 (1951) 「形容動詞弁」 『国語と国文学』 28 巻 5 号

(ソフィア大学客員講師)